

尾竹一枝と富本憲吉（承前）

——恋と結婚のリアリティ——

渡邊澄子（大東文化大学名誉教授）

Kazue Otake and Kenkichi Tomimoto

——The reality of love and marriage——

Sumiko WATANABE

『紀要』前号には尾竹一枝が「天才少女画家出現」と報じられた絵が破格値で売れたそれを原資として創刊した『番紅花』について述べた。一九一四年という時代に二〇歳の女性による自力での雑誌創刊は壮挙と言えるだろう。この創刊が表紙絵を描いた、三年間のヨーロッパ留学から帰って間もない富本憲吉との恋愛に発展して結婚に至った事で一枝の人生は方向転換を余儀なくされるのだが、前号では飛び越えた、時代に先駆けた恋愛と結婚の実相を述べておきたい。その前史といえる人格形成過程からと言う事になるだろう。

幼時の一枝についての資料は極めて少ない。父越堂の弟で明治初期から昭和初期にかけて日本画壇の代表者だった、没後八〇年余の今に至るもその名は消え失せていない（生誕140年 尾竹竹坡展 2018、富山水墨美術館）一枝にとって叔父の竹坡についてその生涯を描いた竹坡の子、一枝の従兄弟の尾竹親によって書かれた『尾竹竹坡傳 その反骨と挫折』（1968 東京出版センター）に描かれた片鱗と、重複するが親氏から直接伺ったこと及び、座談会その他で語られる一枝の記憶ぐらいである。富山市越前町に生まれた一枝や妹福美の子守役はもっぱらまだ少年の域を脱していなかった染吉の竹坡だったと言う。その頃の竹坡を「叔父さんは、よく本を読んでいた」と一枝は親に語っている。既に挿絵画家として、その

絵を受け取りに来た編集者たちが門前に並んでいたと言われるが、画家として生きる覚悟を固めて東京に出て川端玉章門に竹坡が入ったのは満一八歳の一八九六年のことだった。この時竹坡は弟で国観となる亀吉を伴っている。竹坡はその地を好んだ根岸に住み、国観共々順調に画業を進めていたのだろう、兄弟は両親を呼び寄せたものと思われる。理由は不明だが、一枝はこの家に預けられ祖父母の許から下谷区（現在は台東区）立根岸小学校に入学している。一八九九年のことである。この頃について、「勉強についての記憶よりか、学校の春秋の運動会にいつも走りっこの一番になり、かかえきれぬ程ばって賞品をもらったことや、学校から戻るなり、祖父さんに作ってもらった蟬とり網の袋をもって、近所の男子達と上野の山や田端辺に、日の暮れくまで蟬とりにでかけた記憶ばかり」（『母親の手紙』）とあるが、富山の大火で生家が焼失したのは入学して四ヵ月後の八月である。父越堂が仕事の拠点を大阪に移した家に戻った一枝は三年から大阪の小学校に通っている。祖父母の許で過ごした二年間の東京生活は楽しかったらしい。発明狂だった父の美術関連の壮大な計画の成功例は上野公園にある東京都美術館だけで他はすべて挫折したが、歯磨き粉を作って売り出したことがあったという。かき回して作っていた父の姿を覚えているが、チンドン屋の旗を持って街中を練り歩き、宣伝ビラを配って歩いたという思い出を親に語っているが、事実なら一、二歳の頃と思われるが恥ずかしくなかったのだろうか。日露戦争開戦は大阪市東区第一高等小学校一年の時（この時代の学校制度は尋常小学校四年、その上に尋常高等小学校二年があった）だったが、校長先生の談話のあと、みんなで萬歳を唱えたこと、広瀬中佐の話を緊張して聞いたことを覚えている。また、堺と言う所にロシアから捕虜がくるというので母に連れられて見に行ったが、「兵士がみな武装解除されて駅の柵のところに沢山かたまって所在なげに、見物人をながめていました。私はロシアの兵隊さんがあんまり大きいので先ず、びっくりしました。しばらくそこにいるうちに、捕虜を眺めていることが妙に白々しい思いがして、こんどは、ひどく可哀想に思えて来ました。行くときは勇んでいったくせに帰りは何か割り切れない、とてもさびしい気がしたことだけは、はっきり覚えております」（『青鞥社』のころ）と語っている。まだ幼い頃だが感性に一枝が見られる。

幼時から本好きだったが高等小学校の頃には、挿絵を描く父に送られてくる講談本で読む義賊に憧れた。父に見つかる叱られるので押し入れに隠れて夢中で読んだというが、読書領域は次第に広がり、外国の小説や北村透谷・中江兆民にまで及んだと言う。

一九〇六年、一枝は新設の大阪府立島之内高等女学校に入学する。大阪には府立女学校として最初の一九〇〇年創立で伝統をもつ進学校（NHKの朝ドラはじめテレビや映画に撮られる）の清水谷高等女学校と、この女学校と姉妹校の一八八二年創立の師範学校の付属校として創立した大手前高等女学校の二校があったのに新設の島之内高等女学校を選んだのはなぜだろうか。結果的には賢明な選択だったことになるが、一枝たちを第一期生としたこの女学校は南区千年町の千年小学校を仮校舎として開校されたが一九〇八年十一月に天王寺区夕陽丘町に建築された新校舎に移転している。生徒たちは椅子を持って引越したという。取材に伺ったとき松木校長から頂戴した『創立八十周年記念誌』（1986）に掲載の「古

きよき夕陽丘を語る——旧校舎時代——「あこがれとハイカラの夕陽丘」の出席者は三回生から十五回生の卒業生六人だがその発言は極めて興味深い。妹福美と同学年の三回生は一枝と在校時代が重なる。一九一〇年頃から一四、五年頃までの女学校や女学生の様相が語られていて、その弾んだ声が聞こえてくるように楽しく、全文引用したいほどだがアトラダムに少しだけ。

移転先の建設中の校舎を生徒たちは見に行つたらしい。校名に挙がつていた「天王寺」や「桃山」に反対して「夕陽丘」を生徒たちは主張して「えらい運動」をしたという。夕陽丘高女は創立四〇周年記念式から二年後の一九四八年に戦後の新制度で共学の府立夕陽丘高等学校になつていく。旧制度の高女時代の卒業生には、受賞歴を持つ画家だったが留学先の米国で結婚、自閉症の子の世話によって小説家に転進して芥川賞受賞作家となつた反戦・反核運動にも熱心な米谷ふみ子や、労働省婦人局長、ウルグアイ大使、文部大臣などを歴任した赤松良子や日本で最初の女性弁護士になつた久米愛などがある。私事だが赤松さんとはうち解けた親交の時期を持つが、彼女は夫婦別姓実践者で、民法改正運動や「男女雇用機会均等法」の土台作り、男子中学生の丸刈り規則を戦時下の兵隊を想起させると批判して逆批判を浴びたが規則撤廃への道筋をつけるなど人権確立にむけて多くの功績を持つ人である。この人たちに共通する進取の気性は夕陽丘高女が育んだものであろう。そこを卒業生の発言から拾つてみよう。

口繩坂をのぼると煉瓦のゆるい坂になり運動場に続く道は藤棚に覆われていて、季節には房がびっしりだった。運動場の片隅に小さな鐘があつて門衛のおじさんのならす鐘の音で授業の初め、終わりを知らされた。幾棟かあつた校舎を赤煉瓦の道が繋ぎ、雨に濡れると美しく、傍らの池には睡蓮が咲いた。運動会の後片付けで夕方になつた時見た西空に沈む真っ赤な大きな夕日の美しさは忘れられない。その下に白く光るのは海だ。講堂は勝鬘院の崖下にあつて格天井にはシャンデリアが下がつていた。講堂の前には和室が幾つもある和風の建物があつて、お作法の時間は足が痺れて困つた。窓に簾がかかつていたことがあつて、誰かが「香炉峰の雪はいかに」と清少納言を真似たので笑いがはじけた。外は愛染塔で、夕陽庵と茶畑の間の道を通つて裏門を入ると生徒たちの語らいの場となつていた家隆（歌人・藤原家隆）塚があり、講堂の横にはサルビアが、図書室の前にはミモザが咲いた。校庭の並木は桜の大樹で春の花吹雪はすばらしかった。制服は古代紫の袴で、袴の腰板の松葉つなぎの模様が校章だったが、洋服（セーラー服）を着る自由もあつた。袴の長さは一応決まっていたが、おしゃれから規定より長くしたり短かくしたりしても叱られなかった。着物は綿大島か銘仙が普通で、清水谷や大手前高女は筒袖だったが夕陽丘は中程度の長さの袖は許されていた。髪型は束髪のように結いあげていたが次第にお下げにする者がふえていった。よその学校では厳しく禁じられていたが「うち」は大きなリボンで結ぶのも自由だった。「きれいな校舎、きれいな人が行つてはる学校」と憧れて一生懸命勉強して入学した人が多い。式の時などに着る紋付きは八割が袖だったが縮緬の紋付きを着ていっても派手と叱られることはなかった。伊賀校長がすばらしかった。女の子が容姿を気にしてきれいなりたいと思うのは当たり前、と自由主義だった。卒業生の誰もが口を揃えて語るのをお掃除当番のこと。拭き掃除の水を変えるのは校長先生の役目で、黙ってバケツを持

ってきて雑巾を絞って渡してくれるが「水が汚れると新しく汲んできはるんで、自然に皆、掃除を嫌がらずにしようになった。校長さんが先にたつてするので」。

四年は白、三年は水色、二年はピンク、一年は赤のリボンが綺麗で、運動会に憧れて入学した人も多かったほど運動会は有名だったが、登山も女学生が登山ということに驚かれた。一枝が四年時の六甲登山は事件扱いだった。運動会は観客二〇〇〇人超と報じられたが、通学の途中で出会う大阪高商の生徒から切符（入場券）をねだられるが、あげるのは禁じられていた。女学生から貰えない高商生たちは家隆塚や愛染さんからもぐり込むので、にきびだらけの顔が観客のなかにならなかつたという。卓球やテニスが盛んだったが一枝はトップ活動者だった。この頃のことを一枝も「青鞥前後の私」で語っている。「あの時の女学校は、ちょうど日露戦争後の興隆期にあたり、東京の大学で新しい教育をうけた先生方が集まって、学校全体が非常にフレッシュでした。校長も進歩的な考えを持った人で、若い先生たちを大切に、どちらかといえば自由に、その考えを通してあげていたようです。英語と国語には特に力を注いでいたようでしたし、運動もなかなか盛んでした。テニスやピンポンもやりましたし、夏は、海に出かけて水泳もやりました。私はピンポンではクラス一で、テニスは前衛でなかなか活躍しました」と。雪月花リレーはとりわけ好評だった。一九〇九年（一枝三年時）六月に露国觀光団の参観があり、この時、ロシアの国歌を生徒が歌って歓迎したことは新聞記事になった。清水谷や大手前に比べて校舎も生徒も綺麗だったので参観者が多かった。「とっかけ、ひっかけの参観者で、その度に糠袋での廊下の掃除にはへきえきし」と想い出話に花が咲く。武下先生の思いつきでオームのいる小使い室にお弁当を温めにくようになったが、お弁当を食べてから、口縄坂を上って辻へ出て左に入ったところにあつた寅の餅というおせんぱい屋さんに学校を抜けて行ったが、あみだをして負けた者が買いだしに行くこともあつた。まるきというパン屋さんがあつて蒸しパンを買って食べたということはズロース問題とともに一枝も語っている。裁縫の時間にズロースを縫い、それを穿くように厳しく命じられたが、ズロースを穿く習慣はそれまでなかったので気持ち悪くていやだった。今では想像も出来ないが、着物生活のこの時代、着物の下には「腰巻き」を肌直に巻くだけだった。肋骨での体操は困った、ズロース着用で違反して穿いてなかつたらお尻丸出しになってしまうので。袴の紐を長くしたり、幅を広くしたりして、蹴って歩くのがおしゃれて流行った。先生に文句を言われることはほとんどなかつた。

女学生のストライキでは先駆的だつたのではないだろうか。みんなの好きだつた先生が清水谷に取られることになって反対の慰留運動のストライキをしたが、さらに、清水谷の教頭が夕陽丘の校長になると知って反対運動のストライキをした。講堂に三日間籠城したが、卒業免状をやらぬと言われて、それではお嫁にいけなくなるので中止したという。一枝が四年の時から生徒の自主的企画で学芸会といえる文芸会が開かれ、まだ習っている人は一、二人だつたピアノや、謡などのほか朗読や寸劇もあつた。一枝は歌と朗読に出演している。良妻賢母主義の清水谷や大手前では考えられない「ハイカラ」さだつた。卒業旅行があつて、まだ東海道線は開通してなかつたので御殿場周りだつたが御殿場の星の美しさへの感動

は忘れられない。当時は東京に行くなんてとんでもない時代だったが東京から仙台まで行った。神田の木賃宿泊まりは情けなかったが宮城一回りや浅草の観音さん、水戸の大洗海岸にも行った。別の回生は四国・九州方面で、屋島、宮島、別府など三泊で、金比羅参りをして多度津で泊まったが、汽車の時間のために夜中に起こされ寒かったが降るような星空を見たあの感動は今も思い出す。楽しい思い出に満ちた修学旅行も生徒の主体的企画だったという。青鞥派運動が華やかだった頃も閲読禁止などはなく、女性の自立意識を自覚めさせられたように思う、と遠い過去を振り返って語っている。この座談会に出席の最年長の長島さん(九三歳)への電話インタビューで、同級生だったのに福美は思い出せないが、校内を風をきって歩いてきた校内での人気者で魅力的だった二枝の姿は今でもはつきり目に浮かぶと張りのある声で話してくれた。既発表の一枝に関する拙論を送って取材申し込みをしていた夕陽丘高等学校の当時の校長松木福男氏は、一九九四年完成に向けての校舎改築でお忙しい時だったが、快く迎えてくれて、校舎の案内から、卒業写真、学籍簿、『創立八十周年記念誌』『夕陽丘 PTA会報』その他の資料を用意しておいてくださったのには感動した。私の訪問後、松木校長は富本憲吉記念館にも行って得た知見によって、二期期の終業式で、尾竹一枝と『青鞥』について全生徒に話しをしたところ、先生方も含め、そんな先輩がいたのかと驚き、学校への認識が深まったとの手紙をくださった。校友会「ちとせ会」による一九〇八年創刊の通信を主目的とした会誌『葉月』の通信欄には、二人のクラスメートが自身のことでは無く、一枝の日焼けと九州旅行で門司の旅館の二階から落ちたという、一枝から聞いたエピソードを書いて一枝の人気者ぶりが偲ばれる。この号の「文苑」欄に一枝(三年)が「美代ちゃんの日記」福美(二年)が「古机の獨語」を載せている。掌編とも言えない短い「お話」だが、文筆家が夢だった一枝の初めての創作である。東京から帰ってきた兄から可愛い眠り人形をいただいた。嬉しくって名前を考えながら寝たが起きたら人形の鼻が欠けていた。驚いて泣きながら母様に訴えに行ったら、お口に餡がついている、お菓子をあげたんじゃないの、鼠に囁かれたんですよと言われた。昨日、お菓子をあげたのだった。文ちゃんたちに自慢して見せる積もりだったのがっかりしていたら翌日、お兄様が新しいお人形を買ってきてくださった。文ちゃんたち早く来ないかな、というお話。一枝に兄はいない。虚構である。翌年『葉月』は『ちとせ会誌』と誌名を変え、ちとせ会役員として会長は校長、幹事は教員、委員は生徒十二名だがそこに一枝も入っている。目次に「露国觀光団の来校」も見られる。『ちとせ会誌』二号は一枝が卒業の年で「第一回卒業生」として名が挙げられている。第三号は一九一一年(明四四)年六月発行で、一枝は入学した女子美術学校を中退して叔父尾竹竹坡の許で家事手伝いをしながら画家修業中で、『青鞥』に出会った一枝の生涯におけるエポックメイキングの年でもあるが、一枝について「度々学校に來られて相変らず、面白いことをいって居られます」とあり、また誌名の変った第拾貳号の『学校通信』(一九一五・二)には、「尾竹一枝様、昨年末大和の方に御良縁があつてお嫁でなすつたさうで一度御主人と御一緒にお出でになりました。見ちがへる程やさしくしほらしくなられたので私共はテニスコートからチラと見て全く別の人だと思つてゐましたが後で尾竹さんだと聞いて驚いた次第でした」とある。一枝の卒業後四年経っていて執筆者は一枝を知らない筈だ。語り継がれる人気者だったのだろう。一四年の十月に結婚した一枝は十二月に憲吉を伴って母校を訪ねて

いる。一枝にとって女学校時代は大切な時期だったの認識によったのだろう。その女学生時代を松木校長から送られた考査簿（学籍簿）によって想像してみたい。「明治三十九年入学」「一回卒業生」、「明治二十六年四月二十日生まれ」、「明治三十九年四月廿五日入学」の尾竹一枝の「身体状況」は、成人女性の平均身長が一四五^セ位だった時代に、一年時は一四九^セで四年時では一六四^セとなっている。「氣質」は「多血」、「性格」は「躁急」、「姿勢」は「正」、「動作」は「粗忽」、「言語」は「明瞭」。そして「評語」は「丙」で四年間不変なものには思わず笑ってしまう。欠席は一年時は一四日、二・三年は三、四日、四年一日だが、遅刻は一年一日、二、三年時は六日だが四年では三〇日と多い。成績は常に上位で、四年時では作文・歴史・地理・図画・音楽が平均九〇点以上の高得点で不得手科目は数学・理科。席次は一五番とあって面目躍如である。

ついでに妹も挙げておく。三回生の福美は、身長が一年時の一四九・二^セ、四年時は一五六・五^セで当時としては長身。性格は一年時が「勝気ニシテヤ、短気」二年以後は「勝気ニシテ氣ノマハルチナリ故ニ往々人ヲ誤解スルコトアリ」、姿勢は四年間「正」、動作は一年「軽躁」、二年以後は「非常ニ軽快ナルコトト非常ニ沈鬱ナルコトトムラアリ」とあり、「教養上ノ意見」は「ナルベク好意ヲ表シテ根性ヲヒガミスヨウアリタシ」で評語は四年間不変で「乙」。欠席・遅刻が三、四年で増えているが、成績は英語・図画が突出して高点で席次は一年時四番だが四年では一七番になっている。蒲柳の質の浅井三井は「個性」に「神経質ニ粘液質ヲ混ズ、正直、同情深シ、柔和」とあり、姿勢は「ヤ、不正」、動作は「一、二年が「着実」三、四年が「着実、稚氣ヲ帶ブ」、言語は四年間通して「ヤ、不明」、評語は四年間通して「甲」である。「教養上ノ意見」は三年まで「姿勢ヲ正シ活発ナラシムルコト要ス」で三年時は「勉メテ修養セントスル様ナルガ神経病的ニ傾ケル点モ見受クルヲ以テ注意ヲ要ス 従前ヨリハ快活ニ趣キシモ尚一層心ガケシムベク」、四年時は「身体虚弱ナレバ留意シ健康ナラシムルコト」とあり、欠席は多いが遅刻・早退は極めて少ない。成績は作文が突出して席次は一年時は九位だが四年時は四一位になっている。後年、少女雑誌の挿絵を描き、少女小説なども書いていて有島武郎に愛された人だが三人姉妹中、身体虚弱だった三井が一番の長寿者になっている。

この時代、女学校卒業は結婚に直進が常態だったらしいが、一枝にも両親にもその道は想定されていない。娘を「閨秀画家」に育てるつもりだった父の、本の虫になっている一枝に下田歌子女史のような立派な学者になりたいたいなら読書も許し、画家への道も諦めるの言葉に、とんでもないと怖じ気だった一枝の進みたかった道は文学か、音楽だった。あんな馬の嘶きのような声楽なんて勘弁してと驚いた母が勧めたのは英学塾（現津田塾大学）進学だったが、それは一枝の求める道ではなかった。東京に行けば本当に進みたい道が開けるような都会幻想に駆られていた一枝を救ったのは、折良く来合わせた叔父竹坡による美術学校進学の勧めだった。この弟を高く買っていた父は竹坡の提案を受け入れた。上野の美術学校（現・芸大）は女子の入学を認めていなかった。弓町の校舎が焼失して菊坂に新校舎の出来た女子美術学校の日本画科に入学したものの、日本画を好きになれない上に授業のつまらなさ、竹坡の姪と知った主任の川端玉章の特別扱いに我慢できなくなり、西洋画科へ転科の許しを願った父への手紙の返事の来ぬうちに寮監と衝突して出てしまい、結局退学してしまふ。叔父竹坡の家で家事の手伝いをしながら、落谷虹児もその一人だ

った弟子たちと交じって絵の修行をすることになるが、ここで一枝にとって人生の分岐点となった『青鞥』と出会ったのだった。

青鞥社員たちから「へんな人」と笑われた舌足らずの手紙を矢継ぎ早に送っていたが、東京での文学の話の出来る唯一の友人だった、著名な浮世絵版画家小林清親の娘で仏英和女学校専攻科生で青鞥社員だった小林哥津に連れられてうの丸窓の部屋を訪れ、らいてうの虜になる。この時の感動を後に一枝は繰り返し書き、語っている。緊張から「偶像をおがむように平塚さんの前でかたくなり」辞しての帰り、電車通りにでるまで「唾のようにだまりこくって歩い」たのは「ちよつとも言葉が口から出ると、すばらしい宝が飛び散るような気がし」たからと。以後、頻りにらいてうの丸窓の部屋を訪れるようになる。久留米絣に袴、雪駄ばきという粋な服装で風を切って歩き、言いたいことを言い、大きな声で歌ったり笑ったり自由な無軌道ぶりは「生まれながらに解放された人間といった感じ」でその愛嬌ぶりで社員のみんなに可愛がられると、「幸福のやり場のないような顔」をするので、またまたみんなに可愛がられたという。『青鞥』は紅吉が編輯室に顔を出すようになると若々しく賑やかな雰囲気であつた。彼女の書く六号活字の「編集室より」は読者を惹きつけるページとなつた。この当たりは「らいてう自伝」『元始、女性は太陽であつた』下(1971 大月書店)が詳しい。

紅吉が絵を描く人と知つたららいてうに表紙絵を描いてみないかと声をかけられて躍り上がり、『白樺』を通して知つた、ヨーロッパから帰つてもない芸術家と知つて刺激を受けたかつたのだろう、法隆寺近くの安堵村の富本憲吉訪問は一枝一九歳の一九二二年初めのことで、この時描いた「太陽と壺」は第二巻第四号の表紙を飾つたが、憲吉の影響は見られない。憲吉は、東京美術学校在学中に早々と卒業制作を提出して〇八年十月からロンドン中心にヨーロッパやインドを回つた私費留学(美術学校卒業後の高村光太郎は〇六年から〇九年にかけて米・英・仏に私費留学している)から帰つて間もない新進気鋭の芸術家だが、進むべき方向を決めかねていた時だった。斬新な表紙絵を描いてらいてうに褒められた一心から近代の息吹を浴びたかつたのだろうが、この時代に、若い女性が未知の若い男性訪問は常識では許されないだろう。この出会いが二人の人生を決める事になるとは神ならぬ二人は知る由もなかつたが、この時、心をわしづかみにされたのは憲吉の方だった。「近代」を身に付けて帰つた憲吉にとって安堵村の陋習囂繞は耐えがたいものだった。そこに現れた自由闊達な、当時の若い女性の鋳型からはみ出した一枝は憲吉にとって衝撃だった。以後、憲吉は一枝に手紙の矢を放つが残されている手紙は二月八日から始まる。「御来駕を待ちます なるべく早く」。次は二月一五日。「マダマダ申し上げても申し上げて云ひ切れない事が沢山あります」、お手紙は生駒郡安堵村として下さい、法隆寺付近では一日遅れますので、などとあり、三通目では「温かい日に御出でになりませんか」、五通目四月一三日付けは長文で、「大和の今はステキです、只シャバンヌの様な柔らかい空に桃の花が砂の丘に咲く 菜の花、麦のグリーン、わら束、ソロソロと咲き出した春の野の花、実にキレイです。遠い処に円い青い山が屏風風のように見えます。」「五月の初め頃の富雄川と云ふ法隆寺の果を流れる小川に白い野バラがステキです。御案内致します。春になって山と野も馬鹿にキレイ

ですが寂しい事は前に同じです」と寂しさを託しながら、美に敏感な一枝の感性に訴えて来訪を求めている。ラブレターの趣だ。その頃一枝が初めて描いた日本画「陶器」の銅賞受賞を新聞で知ると自作の木版「壺」を送って祝っている(四月二一日)。受賞を祝って開かれた同人のミーティングは盛り上がり過ぎて泊まり込みになったこの夜(五月三日)、らいてうの仕掛けた「同性の恋」に舞い上がった紅吉はらいてうの力になりたい一心から起こした「五色の酒」「吉原登楼」騒動によって「新しい女」の筆頭に祭り上げられるが、軽い肺疾患で茅ヶ崎の南湖院に入院ということがあって、つきそう形であらうが近くに寄り住んだことで編集室が茅ヶ崎に移ったかのようになっていたそこへ、途中で偶然に出会ったという画学生を伴って編集の打ち合わせに東雲堂の西村陽吉が来たのだが、らいてうと画学生の初対面の一瞬の反応を見逃がさなかった紅吉の危惧は的中して、程経ずにやって来た画学生をらいてうは自分の部屋に泊めたのだった。無惨さに嘆く紅吉を保持研や伊藤野枝がああ時の平塚さんはほんとうに酷かったと述べているが、紅吉との「同性の恋」を赤裸々に発表していたららいてうが、画学生奥村博(後、博史)と事実婚を始めた時、同性の恋なんてウソで、それが証拠に今の生活があると言っているが何とも卑怯だ。

退院後の紅吉に新しい表紙絵を描くように言われて、紅吉はこの年十二月、憲吉を再訪している。その通知を受け取った憲吉は雀躍する。「明治四五年一月一六日」の手紙は、津田青楓の「奥さん」から見せて貰った『青鞥』で入院を知ったとあり、大和再訪の手紙の返事は嬉しさから長文だがへどもどした文面で、「大和に御出でとの事、久々に面白からふと考へます」、「寂しい方へ変って行く自分の心はますますはげしい」とある。憲吉の手紙は巻紙に毛筆が多い。翌一九一三年の手紙はそれまでの大阪市南区笠屋町から一家で移住後の「下谷区中根岸」に変わり、東京での憲吉作品展への「御来観」願いが多いが、「大正三年一月四日」の手紙には『番紅花』の表紙絵の下絵が描かれていて、三月六日には創刊号と第二号の表紙絵に描かれた「德利」は失敗だった、描き直すもあり、第三号からは下絵が活かされてぐんと華やかになっている。この頃の頻繁な手紙によって『番紅花』の裏面史と憲吉とリーチとの連繋の深化、憲吉芸術進展の様相がみてとれる。七月六日便には「リーチ宅にて *Afternoon-Tea* 差し上げた」御来駕の程待ち入り候」とある。サインは「Ken Tommy」又は「Ken-T」となり、一枝への高揚感の高まが見られるが、一枝も憲吉にこの頃になって惹かれていったらしいことが透ける。憲吉も一枝も手紙をよく書く人だった。憲吉の手紙は残されているが一枝の手紙は残されていない。女性の手紙の残されていないのは憲吉・一枝の場合に限らない。男尊女卑制度下の女性下位視によるだろう。七月十二日の長文の手紙は女性史上、記録されねばならぬものである。残念だが要点のみ。

手紙ではダメ、「オープンリー」に話したい。「御説の通り、幾度お目にか、つても云ひ残した様な感じがします」、五月にお会いし、また赤坂で別れた後、「国の奴等と分かれる事」、「大和で出来ない本焼きを試みる」ことを考えています。「あなたも大和に來られて、御解りになったでしょうが、私程自分の家族と遠いものは無かるふと思ふ」、「双方に通じない」「ヒドイもの」なので、「大和に困難を排して來られた処で私もあなたも勉強が出来ない事になります。今の私の考へでは事務所と寢室を兼ねた処でよろしければ來られて仕事の手伝ひをしてくださる事なら毎日でも御

願ひしたいと思ひます。」「兎に角今の処では大和をにげ出す事です。にげ出す様な処に來られても仕様がなんでしょう。あなたの方では東京を去る必要がある、その事も私には解りますが、私も大和を出たい」、「私の新計画に幾分の御助力あらむ事を祈ります」とあつて、二人の間に結婚話が語られたようにも推測されるが、四、五日うちに鹿澤温泉に行き、九月始めから東京での生活を始めるつもりなので、「色々御厄介になる事と思」うとある。この手紙は近代を身に付けた新しい男と一枝が恃んだその男の芯にこびりついていた家父長制度の露呈といえるだろう。二作目も受賞して画家として社会的に認知された自立した個人だった一枝を、共に芸術家として大きくならうという対等・平等の意識ではなく男の仕事の「手伝ひ」だったのだ。奈良という土地で何代も続いた旧家の庄屋に長男として生まれた男の解放されない権威主義だろうが、この時、無意識に洩らした言葉の重要性に二人は気づけなかった。

七月一六日の「群馬県吾妻郡鹿澤温泉 増屋旅館」からの長文の手紙は、「トウトウ気狂ひの様に安堵村を飛び出し」鹿澤温泉に來てしまいました。「八月中居るつもりです」、「來られては如何です。そう云ふよりも來られる事を切に祈ります」、追記では、駅からの四里は馬だが、駅まで御迎えにいく、荷物は多くても平気、寒いのでセル位は必要、と來る事が前提されたものになっている。七月二三日のこれまた長い手紙では「アナタが來られるか」、「今又あの長い御手紙を又練りかへし読むで見ました。若し來られないなら此処から七里山奥の温泉へ馬に乗って行って仕舞いたい程さみしがって居ます。來られますか。其の温泉に行つた処で別にさみしさが減ずる訳ではないから兎に角アナタからの電報を待つばかりです。」「随分身勝手な」手紙になったが「書いて居る間だけでも、チット考へて居る厭な気持から遠ざかり得るので、話して居るツモリで此れを書きました」「夜十一時」とある。その後の手紙も「若し」としながら一枝が來る事を前提しての催促になっている。立て続けの手紙に、心が逸つたのだろう、「イチジツアサタチマス カズエ」。

一日から八日朝鹿澤温泉を後にするまでの七日間の鹿澤滞在が一枝の人生を決する事になるがこの間の推移は近代恋愛史のドラマとして刻印されるに値するだろう。

一枝が東京に帰つた後、結婚までの急転の二カ月間に送られた残されている手紙一一通と長短一四編の詩が恋のドラマを彷彿させる。その第一は別れてすぐの「昼めしの詩」で、「獨りになれる寂しさに」に始まり「君はなし、／君はなし」で終わる「××××× *mazy kisses* / K.T.」様だが、「拾日夜九時」とある長文の手紙は、「今日何うもウマク別れられない様に思はれましたから花をつみ少し道をおくれ、突然走りよって随分芝居の様な別れをした事をおゆるしく下さい」、あれから「昼めしの詩」を書き、長い間帳場に座って呆然としてましたが部屋に戻り「あなたが寝て居られた室にはまだ誰も來ませむから、矢張り居られたと同じ位置に諸道具を列べせてもの心やりとし」、夕飯は何を喰べたか解らずにすませたそこに馬方が帰ってきて、あなたが無事に汽車に乗られたことを知り安心しました。馬方に託してくれたお手紙を懐に入れて部屋に戻

ってランプの下で読みました。「有り難う。若しホントウにそう思ってくださいるなら（此の語は此処に不適當ですが）私のかいた前の詩と同じ意味じゃありませんか（前の詩不明）。いやはやわれ／＼は随分短時間にヒドイ雑然茫然たる国に入り込むものですね。」もう着いた事と思うが、何を話してのだろうか、「御つかさむが、アナタが此処に来られた事を面白く思はれない」なら「自分は何うして伯父さま（竹坡のこと）や御っかさんに遇はふ」、「独り残って居る自分を思ってください。」私がアナタを好んだ第一はウソをつかない事」でした、「何うか御内の方にあった一々を偽らずに恐れずに細々と書いて送ってください。コンナ愚チっぽい事を書いて自分ながら実にアキれる程です。」「拾日夜九時頃 Ken / ×××××」その後、追記で「今風呂に入つて寝様としましたが、今入ると兩人で入つた月の光が思ひ出されますから、よして寝ます 独り」とあつて、両者間の深まりの大胆さにあつと思わず声を挙げてしまふ。

詩を書く事で紛らそうとしたのか、詩は続く。「君のたち給ひし凡一時間後」、「K・T KZエ様 X（極大）kissed here」とある手紙に添えられたと思われる十二連の詩から部分引用してみたい。

「アネモネに類する花をつみ取りて／君に送ると草ふめば／涙の如く露ぞ乱たる／涙の如く露は乱れて」
 「アネモネに類する花にシタ添えて／鹿澤なる最後をおしむ／しるしにと／小半町を走りより／君に渡せば、渡す花を／取らむと見せて、温かき、君が手／わが手を握るなり」
 「あ、絶えがたき／寂みしさに／玉露をのみて／静にも 君の／ロシヤ更紗取り出だし／君が恐れし／くちづけに／少時の憂を忘れ居る／われ ある事を忘れ給ふな」「われある事を 忘れ給ふな」

三番目の詩は結婚を急いだのはこのことか、と思わせるシヨッキングな詩である。

「八月のある日／人となりたる、よろこびを／となえ上げれば 高やまに／いかづちはためき／白雲は飛ぶ」「木間がくれに、流れくだる／谷の水、只ひとすじに／流る、如く／わが思ひ 君に流れて／やむよしもなし／せくよしもなし」「八月のある日／人となりたるよろこびを／となえ上げれば／春の如き 高山に／鳥はなき 花はさく」

別れの寂しさを託つ詩が続くが「詩九」は、「町に帰る 君送らむと／荷を造るだに／獨りありて 煙草すう／光る眼の わが顔の／心にうつり／たえられぬかな」「歌うたえど／笛ふけど／貧血のわが脳に／寂みしさと追飲の蔭／いどみ合ひ 投げあひて／やむ由もなし。」「詩十二」の二連詩の後半部は、「残されて／寂みしく深いためいきを／あの唐松に投げるのか、／それを思ふてもゾツとする／コンナ無情な別れめは／向ふの山へ飛むで行け」。いくら吐き出しても癒されぬ。「詩十四」の十一連から成る長詩では留学以後を振り返っている。

「戦争のはなし、生家の話／帳場に集まる人々と／長話してかへり来る／君なき室のあぢきなや／雨ふる様な水音が／チョビ／＼となつては居れど／君なき室のあぢきなや」「何故に鹿澤に來り／何故にコンナ山中へ／「血の石の指環」持ってきた／問ふて見たれど からかみに／下手にか、れた山水に／シミた雲の様なシミあるばかり／自分の心が答えて呉れぬ」「薄暮はせまる 君はなし／今日 君の手に飾られて／行つた指環

を静かにも／思ひ合せて此れをかく」「千九百八年の夏／欧州印度と旅人の寂しさに／つかはてた若い自分は／あの「血の石の指環」を／右手にさし／細い雨ふる神戸へついた／それから大和へ／それから都に」（中略）「倉の様な、僧院の様な／草茫茫たる建物を／画室に使ひ 若者の／はげしき欲と禁欲を／胸につ、みて／静かにも／日なく夜となく／ふさぎて居たり」「満三年のデイドリーム／今日にして 思ひ見れば／はかないかなや／冷めたし冷めたし」「か、る時 君を見たり」（中略）さらに詩は続く。一枝の来訪は、「いざりずに復帰り行く可きか／或は印度に道者となり／林中に手を上げ、バラモンの／密ソを教はり世を捨つ可きか」と思ひ惑ひて居たりけり」の「夢遊病者」のようになっていた時だったが、「指環を君の手に／のせおふしたる一シユン時／わが三年のくるしみは／峯の氷の春光に／とけゆく如くなりけり」、「今にして思へば」「花々は、晴れく／として／咲く如し、／只花の香ひの余りに高く／酔へるが如し」と現在の心境を述べる。鹿澤温泉での一週間が二人を頂点に押し上げてしまつたが、結婚への許諾が得られるか不安の毎日だつただろう。「恐ろしくて仕様がな」「第一にアナタの身に異つた事でもあつたら大変だ」と思つたと「ナカナカ寝る処でなくなつた」などがある。『番紅花』の編集後記には一枝が頻繁に大和通いしている事が記されていて、一枝の憲吉に寄せた思いの高まりを知る事ができるが、鹿澤滞在後の二人は結婚を急いだと思われる。憲吉との結婚に反対だつた父への抵抗か、一枝は憲吉と共に棲してしまふ。憲吉の手紙の宛先は「東京市下谷区茅町二の拾四 富本憲吉方 一枝様」になっている。結婚までの残されている手紙の二七通目は近代恋愛史上刮目されるだろう。

東京でのゴタゴタを逃れて美しい自然に囲まれた大和での生活を一枝は望んだのであろう。だが憲吉は田舎では「充分勉強（ホントウの）」は無理だろうと考え、そして言う。

「アナタが家族をはなれて私の処に来ると思はれるが、私の方でも、私は独り私の家族をはなれてアナタの処へ行くので、決してアナタだけ私の処へ来られるのではない、例へ法律とか外観でそうでないにしても、尾竹にも富本にも未だ属しないひとつの新しい家が出るわけである、そう考へて居て貰ひたい」とあつて、ここには家制度の否定、近代個人主義思想が息づいていて感動される。彼は、「アナタの母上のつかれて居られるのを見るのが「苦し」といとも言い、自分の結婚のための移転用意、祖母のこと、案内や当日用のシャツその他買物、そのための金の算段やらで頭が痛くなるそんな自分を「考へて見ると弱い弱い、アナタは今頃どうして居るだろう」、あなたの手紙の中に愛とか恋とかの字があつたが、「普通に云ふ」愛とか恋とは少し違つた、「鷗外さむの一時使かつた『やるせなき思ひ』とでも云ふ思ひが急に或は静かにせまつて来る」。この思いは、ある時は全体、或時は一部となるが、とあり、「考へ考へたあげくは、心配の大砲に心配のタマをこめて大空へブチハナス位がオチだ。オヤスマイナサイ。アノノートに書いた様に私の様にアナタは思つて居ないのだからふかと書きたいが、これは未練らしく思える。／Ken/Ky様」の追記として、「アナタの父上が急に御気の毒でたまらない様になつた、私の考へが此の二十分間で五年も十年も急に年を取つた様に思へる、わけは遇つて話す」とある。画家としての道を娘に託していた父の悲歎を思いやる優しさが見られる。竹坡の説得で結婚を認めた父は、結婚式の振袖

に竹模様を染めてくれる。憲吉も富本家の許しを得る為に祖母の実家の大嶋の伯父と祖母に許諾を求めに安堵に行く。

「Dear Kay 敷石垣々たる／都市の路に／大雨流れ／電雷はためく／われ等の前途を／暗示する如くも／角間にてかくありき／今第二の／獨り東京を立たむと云ふ／ふたりして行く途に／かくありき／只強かれ／われは只 おんみの／強からむを只祈る R・T」。「床に入り／三枚の端書かきおはり／明日来たるわが一生の／最強の言論思ひ見つ」、说得せねばならぬ。旧家の後継ぎの「嫁」に新しい女を迎えることに反対されていたのだった。「君もつよかれ／われもつよかれと／祈りて眼をとす Yours K・T」。九月十八日、天王寺駅からの手紙には、「只今大嶋の伯父と祖母にあひ申し候」「万事都合よく相運び候」、同日の法隆寺駅からの電報は「コトハコブ サチワレニアリ」、十九日のは「アキバレウツクシ ヤマトヨシ ヨテイスミオオサカナタツ」で、溢れる嬉しさが看取される。

一九一四年十月二七日、日比谷の大神宮で憲吉はモーニング、一枝は父による竹の図案の振袖に高島田の挙式をらいてうは厳しく批判しているが、ジャーナリズムの餌食にされて随分困らせた母のための妥協だったと語っている。「新しい女」の結婚は物見高になって家の周りに人垣が出来、車を追いかける者もいたという。式後、夕刻から築地の精養軒で披露宴が持たれ、十時上野発の夜行列車で能登の和倉温泉「和歌崎館」に。以後、尾竹紅吉・一枝は富本一枝としての人生を生きることになる。

帝国憲法、明治民法、教育勅語、良妻賢母教育等々で女性を無能力者、男性の下位者として固定されていたこの時代に、近代個人主義の実践ともいえる二人の恋愛と結婚の新しさは瞠目される。結婚後、一枝は憲吉を一度も「主人」と言っていない。エッセイストの道を歩むことになるが、年時はすべて西暦が使われている。世界の陶芸家として飛翔の過程に一枝の鋭く厳しい美感覚・鑑賞眼が果たした役割は大きく、憲吉はそれを認め、頼りにも力にもしていた。憲吉の作品、仕事を一枝はごく自然の発語として「私たちの」と言っているがその通りなので憲吉は否定していない。憲吉は子育てにも積極的に参加している。玩具や教育具も手作りし、近所から笑われても平気で井戸水の汲み上げ、洗濯物の干し、取りこみなどの家事も自然体で行っていて、この時代では突出した新しい男であった。だが、それは一貫し得ただろうか。一枝が流さねばならなかった涙については別稿に譲る。

追記 紀要第五十九号所載「雑誌『番紅花』——一九一四年の尾竹一枝——」の訂正

- 1, (36) 後から2行目。「日本画専科だけの」を削除。
- 2, (37) 2行目「洋画科が新設され転科の」を、「洋画科に転科の」と訂正。
- 3, (39) 6行目から7行目にかけて。「第三巻七号から十一号までの五号」を「第三巻第一号から十一号まで十一号」と訂正。